

「行きたくなる」仕掛けづくり

若者よ、世界に飛び出そう

海外に留学する日本人学生数の減少など、若者の内向き志向が危惧されるようになって久しい。「グローバル人材」育成に向け、官民挙げた取り組みも進む中、若者の海外への関心を一層高めるためには、何が求められるのか。本誌論説委員を務める京都大学の木村亮教授が、一人の学生の事例を基に、若者が世界に飛び出したくなる仕掛けづくりの必要性を説く。

海外に行きたい病

19歳の夏、一人でカナダ横断の自転車旅行に出掛けた。初めての海外旅行は、テントと寝袋と簡単な調理器具を積んで、野宿しながらの3カ月間だった。カナダの緑の芝生を従えた住宅地の街並みに驚き、そこで将来、暮らすことを夢見た。20歳になると、次はどの国を自転車で走るかばかりを考え、アルバイトに明け暮れた。

24歳の時には、サハラ砂漠を縦断した。「どんなものでも食べ、誰とでも話し、どこでも寝る」をモットーに、気付けば世界中4万kmを走っていた。一種の「海外に行きたい病」だった。

京都大学工学部土木工学科の学生だった当時の私は、人々の暮らしを豊かにするために建設会社に

入って海外で橋や道路の建設に携わることを夢みていた。ところが、尊敬する教授に「大学に残り研究を続けては」と勧められ、研究者の道を選ぶことにした。研究の合間に海外に自由に行けて、留学もできると考えたのだ。

25年前、国際協力の一環でケニアに渡り、現地の大学で土木工学を教えながら心優しい学生たちと3カ月を過ごした。青い空と白い雲、緑の木々、赤い大地に魅せられて以来、毎年、その大学の教壇に立つようになった。

そのうち、アフリカの人々の暮らしを豊かにし、貧困削減につながるためには何が必要か考えるようになった。湧き上がってきたのは、「雨期になるとどろどろになって通れなくなる道を何とか通れるようにしたい」という思いだ。

せっかく作った農作物を市場に運べず、病院や学校に行けなくなる人々の力になりたかったのだ。

機械を使えば簡単な道路の補修も、資金難の国では住民自身で直せなければ持続しない。そこで、

袋の中に現地の土を入れ、木鋸で突き固めた「土のう」を使って道路を補修する方法を教えることにした。自分たちが毎日使う道を自分たちの手で直した住民に笑顔が広がった。今、私が海外に通っているのは、いわば「開発途上国の発展をお手伝いしたい病」と言えるかもしれない。

自分で扉を開こう

若者は無限の可能性を持っている。少しぐらい失敗しても、方向を修正し、夢に向かって突き進めばいい。若いうちに世界に飛び出し、自分の目で直接見て体験し、その後に役立ててもらいたい。世界を見て日本の良いところに気付き、好きになる場合も多いからだ。

ところが、近年、若者が海外に興味を示さなくなったと言われている。安い航空券が出回るようになっていながらも関わらず、「海外に行きたい病」にかかる若者は減っているのだという。

私は不思議でならない。インターネットやテレビで世界の情報を簡単に得て、SNSで世界中の人たちとつながることが可能になったため、わざわざ自分で世界への扉を開こうとは思わないのだろうか



ミャンマーの村の子どもたちと記念撮影する前田紘人君(3列目)

か。さまざまな人と出会い、新しい自分を発見したいと思わないのだろうか。それとも、中学や高校の修学旅行で海外に行ったり、小さいころから家族で海外旅行に出掛けたりする機会が増え、「一度行ったからもう十分だ」と思うのだろうか。世界地図を眺め、「この国はどんな国で、どんな人が住み、どんな景色が広がっているのだろうか」と想像を膨らませにくくなっているのだとしたら残念だ。

1年間の武者修行

ここで、自ら扉を開けて世界に飛び出した若者を紹介する。

私の大学では、3回生の終わりに所属したい研究室を学生自身が選ぶシステムになっている。学生は各研究室の研究内容を事前に調べ、2月に見学して回る。今年2月には20人ほどの学生が私を訪ねてきた。私が毎年、「土木工学の新しい風」と題して2回生向けに「土のう」を使った道路補修で世界を変えようとしていることを紹介しているからだろう。その中でも特に海外に興味を持っている様子の1人が、「先生のNPOは、今、どこの国で道路補修を行っていますか」と尋ねてきた。

われわれはちょうどその時、世界5カ国に置いている現地事務所の1つ、ミャンマーに1年駐在できる若者を探していたため、興味があればメールを送るよう話をした。主な仕事の内容は、①現地コーディネーターとして道直しの現場に立ち、予算管理を行うこと、

②現地NPOとの協同事業であるため、担当者と一緒に事業を進めること、③日本大使館の担当者に定期的に事業進捗報告を行うこと、の3点である。さらに、④ミャンマーを直接見て若い国の発展を感じることに、⑤ミャンマーに進出する日本企業の活動を観察すること、⑥海外で1年間住みながら、今後何がしたいのかを考えること、についても強調した。1年間の休学が必要になる。

その夜、彼から「競争は激しいと思いますが、1年間行きたいです」というメールを受け取った。性格が前向きで積極的である上、英語がそれなりに堪能で本人も自信を持っていること、さらに、世界を見てみたいという情熱が感じられることから、彼の派遣を決断した。即決だった。まず、3月に現地に2週間派遣した上で、4月から正式に1年間派遣した。ボランティアではない。給料は大学の学部卒の平均額以上。現地での住宅手当も付けた上、往復の飛行機代も支給し、1カ月の休暇もある。われわれのNPOでは当たり前前の待遇だが、学生にとっては破格の条件だ。

何物にも代えがたい体験

この学生は、京都大学工学部地球工学科4回生の前田紘人君だ。高校まで野球に明け暮れた好青年で、「現地にもすぐに溶け込めるだろう」という私の予測通り、私が5月に様子を見に行った時には、実に生き生きと活動してい



京都大学大学院 工学研究科 教授
(特活)道普請人 理事長
国際開発ジャーナル論説委員

木村 亮氏

京都大学大学院工学研究科修士課程修了。京都大学助手・助教授を経て、2006年より同大学国際融合創造センター教授、2010年より工学研究科教授。07年、土のうを使った開発途上国の道路整備を行う(特活)道普請人を設立し、その理事長を務める

た。2週間に一度送ることを義務付けた活動報告書も、内容と記述方法ともに、回を重ねるに従いみるみるレベルが向上していった。

「道が良くなったのを機に、村の未来を担う子どもたちが学校に通い、十分に教育を受けられるようになってほしい——。先生のNPOの活動にはそうした願いも込められていると理解しています」というメッセージと共に、先日、活動写真を送ってきてくれた前田君が、自ら扉を開け、何物にも代えがたい体験をしているのは間違いないようだ。彼に心から大きな拍手を送りたい。

「今の若者は世界に行きたがらない」と評論家のようにただ嘆くのではなく、彼らが世界に行きたくなる仕掛けを日本社会や大学、NPOが積極的に作っていくべきではないか。そのために私はさらに力を尽くしたいと考えている。